

武蔵野日曜講筵

無の諸相

――マルコ伝第10章18節――

1989年10月15日

小池辰雄

除け者 日に日に新たなり 自分を無私する 0||1||∞ 天的な「X」 無相の相 無限性
無即無限無量 人間の世界は大ドラマ 無の諸相 無者魂になれ

【マルコ10・18】

¹⁸なぜ私を善いと言うか。神一人のほかに善い（といえる）者はない。

●除け者

富める青年が、イエスがガリラヤから南の方へ行かれるときに、やってきて、

「善き先生、永遠の生命を嗣ぐには何をしたら好いですか」

と。ユダヤの青年が

「永遠の生命」

と、それから

「何をしたらいいか」

と行為の問題を訊いた。いかにも、ユダヤ人らしい問です。今の日本の青年で、こういう問を發する青年が果たしているか。

ところが、キリストはまず、

「なぜ私を善いと言うか。善い者は神のほかに一人も居ない」

と答えた。こういうキリストの言葉に私は正直、驚いたわけです。

私の『無の神学』は正にキリストの実存を土台にして展開したわけです。けれども、私のこの第3巻『無の神学』の書評を誰も書かない。私は要するに、キリスト教界では、教会や無教会や「マクヤ」の方々も結局は、私が理解されない。私は全く独りなんです。だから、『無の神学』というのは除け者にされているわけです。

キリストがユダヤ教の反逆者として、ユダヤ教から棄てられた。最大の宗教改革者が捨てられるわけです。大体、宗教改革的なことをした人たちはみな除け者にされる。マルチン・ルターがそうです。ローマンカトリックから除け者にされた。ウエスレーがそうです。それから、イギリスのカルビン派やピューリタンだとか、みなこれが改革運動をすると、なんのかんのといって除け者にされる。けれども、除け者にされたご連中の真理が逆にまた



伝わっていくから、おもしろいものです。

日本では内村鑑三、無教会です。けれども、また、内村先生の問題はよかつたんだけど、亜流がただ学問ばかりの方へ傾いてしまった。学問的業績は、もちろん私はけなすわけではありません。けれども、それが聖書の本道から観念的にズレてしまった。内村先生自身は観念的なたたきではないけれども。だから、あれだけの力をもっておられた。内村先生、藤井先生、塚本先生はみな単なる観念ではない。それぞれの実存は素晴らしい。けれども、残念ながら、聖霊のことに関してはズレていた。それで無教会はだんだん力がなくなってきた。

手島郁郎君と私が聖霊の体験をして、それがまた除け者にされた。私は

「幕屋」

ということを言いだしたのだけれども――手島さんは非常に共鳴したけれども――私の「無」に対してはやはり今の「マクヤ」の方々も本当はつかんでいない。結局、私は独りなんです。けれども、これは私が発明したのも何でもない。キリストの実存がそうだったから。私はどんなに理解されなろうが、一向差し支えない。キリストが

「然り！」

と。パウロが「然り！」と言ってくれば、もうそれでいい。孤軍万軍で、天界にはそういう万軍がいるから。そういう気持ちでね、私はさびしくない。いよいよ御霊の力が来ているんです。

●日に日に新たなり

実は昨日、昭和医専の――私は昭和医専の1回生から19回生まで全部、ドイツ語を教えたんですが――3回生の同級会に招かれて行った。もと130人位いたのが、今生存しているのが30数人、大体77、78歳で、昨日集まってきたのが18人。古い先生を招いたところが、私のほかにもう一人いて、その方と二人きり。先生方もみな仆れてしまった。そしてまた、学生だった七十何歳のお医者さんたちはもうみな、私よりか歳とって見えるんだよね。それだから、

「小池先生はどういうんだ？」

と不思議がる。中には私のものを読んでいる人が一人いましてね。それで私は、会の終わりの頃に福音を一席やつてしまった。ちゃんと私は第十巻をもって行ったし、また「エン・クリスト」誌37号『聖書は大ドラマである』を持って行ったから、みなに配った。そしたら、「その第十巻をどうしても今日はいただきたい」

と言って持って行った人がいました。私の話を聞いて、

「今日は本当に素晴らしいお話を承った」

と言って喜んでみな帰っていった。しかし、話を聞いて、一応感激するんだけど、さ



あ飛び込んでくるかとなると、これがまた、いるかいけないかというわけです。

「もう77、78歳になつているから、もう遅い」

なんて思うのかもしれないが、ひとつも遅いことはない。福音を受けとるのに遅いということはない。いつだっていい。

私は昨日いろいろ読んでいて、4時間くらいしか寝てない。昨日も言ったんです、

「ほとんど私は疲れを知らないよ」

と。聖霊の世界は、逆カーブにグーッと上がっていくから。普通の信仰は下がるカーブ（放物線）で、段々だめになつてしまう。我々のはいいよもつて、

「日に日に新たなり」

ということ。

「外なる人は破れども、内なる人は日に日に新たなり」^{あら}

とパウロが言うとおりです。いやあ、それはパウロなんていったら凄いから。今度の秋の特別集会では、ガラテヤ書のパウロをやります。キリストを除いては、パウロはなんといつても第一人者です。世界の第一人者と言つていいでしょうね。大変な男です。これが本当に聖霊の力だった。もう本当にそうだ。だから、生まれつきの体力がどうだこうだなんということは、皆さん、ひとつも心配いらん。光が来る、智慧がくる、力がくる、愛がくる、生命が来る。

●自分を無私する

キリストは自分を本当に何ものともしなかった。だから、私は「無者」と言っているでしょ。そんなことは神学者も牧師も言わない、

「キリストは自分を何ものともしなかった」

なんて。

「御意にこれ従う」^{みこころ}

ということはいいます。この「御意にこれ従う」も、自分を否定しなければ本当の御意に従うことはできない。自分に対しては「否」ということ。神に対して「然り」という人は己に対して「否」という。正に自分を無私することだ。みずから己を無私する。

「自分を憎まなければ」

とキリストは言われた。

「己を憎まなければ、私の弟子とはなれない」

と言われた。はげしい言葉だね。けれども、そこに本当に熾^{さか}んなるものが来るのだから仕方がない。なにか、そういう否定的な言葉をいうと、

「どうもこれはしょうがないな、否定されてしまったら、もう消えてしまつてどうにもならない」



なんて思うかもしれないが、そうではないんだ。消えたところに、もの凄いものが現れてくる。これくらい積極的なことはない。

神を肯定しているキリストは、神の懷の中に自分を入れてしまった。ただ肯定しているだけではない、

「あなたの御懷みふところの中に入ります」

と。自分を「0」（ゼロ）にしているでしょ。今度は、「0」は「1」なんです。神さまと一つになっている。神さまの中に入ってしまったっている。

「我もなく、世もなく、ただ主のみ在いませり」

という賛美歌がありますね。二が一つになっている。神と我とが相対あいしているような世界ではなくってしまおう。「信仰」というと、みなそういうように信じ仰いでいるからね。だめなんだ、それでは。

いつも申し上げておおり、私は何回言っても自分でこれは仕方がない。

「あつ、先生はまた言っているか」

ではないよ、

「その世界にいいよ入りましょう」

ということでなければ。あなた方、

「今日ご飯を食べたら、もうご飯をたべなくていい」

なんて言いますか、明日また食べるではないですか。肉体も絶えず食物をいただかなければもたない。我々の魂も絶えず本当の世界に入っていかなければダメなんだ。分かっている世界ではない。

「いつもその現実を持っているか」

ということだけが問題です。現実を持つためには、その現実の中に自分を入れていかなければ、その現実に入らないわけですね。それが段々、恒常的になってくるから、もう意識しなくても、そういう世界に入ってしまう。

「主さまー」

と、心の中で一言叫べば、もうそのキリストと一つになってしまう。そういう世界ですよ、祈りの世界は。

「間髪をいれず」

という。そういうふうに単純になってくださいよ。考えていたらダメです。

「我、惟おもう故に我あり」

なんて、冗談言うなど。デカルトのあの言葉は大嫌いだ。哲学の世界はそうでしょう。

「この世の哲学に惑わされるな」

とパウロが言っているとおります。ということは、なにも哲学を否定しているわけではない。哲学は哲学の存在の意味もあります。けれども、



「次元の違った世界に来てごらん」ということです。

●0||1||8

キリストは自分を何者としなかったでしょ。「善き先生」と言ったら、

「なぜ、私を善いと言うか。神さまの他に善いものはあるか」

と。無善だと。

「私は何も言えない。神さまが言えということを言っているだけのしなだ。

私は何もできない。神さまにさせられているんだ」

と。全部、完全に受け身で、自分はゼロなんだ。これは大変な自覚ですね。自覚をもうひとつ超えたような、第二の自然になってしまっているんだけど。

神と一つになってしまっている。

「0||1」

とは何か。この「1」は神の1だから、これは「∞」（無限大）なんです。

「0||1||8」

ということ。こういう数学ならざる霊的な数学がある。預言者が正にそうなんです。本当の預言者はいつもエホバに一人で呼ばれる。本当のクリスチャンはそうなんです。人の媒介がありますよ。媒介はありますが、しかし、媒介だけでそれでいいとしているのではなくて、必ず一対一の絶対の境地に入らなければだめなんだ。あなた方は、私を通して色々なことをしていますけれども、しかし、

「神・キリスト・我」

というこの一対一の世界に入っていないとだめです。

私たちはこの「0」になれないんだ。いつも「X」なんだ。「何か」「サムシング」なんだ。そういう自己肯定の「X」を十字架が全部、御破算にしてください。

「お前のプラスもマイナスも全部、私は十字架につけた」

と。これは罪ばかりではないんだ、マイナスもプラスもだ。

「プラスもみんなおあずけだよ。私に全部おあずけにしないさい。才能があるか。そうか、それもよこせ。体力があるか。それもよこせ。金力があるか。それもよこせ。社会的な地位があるか、それもよこせ」

「あれども無き世界に入れ」

ということですよ。

●天的な「X」

そうすると、この「X」が今度は天的な「X」として働きます。これが霊的な働きをはじめ。



我々が賜つたいかなる才能も、それが全部神さまのために使われることになっていく。お金であろうと、地位であろうと、体力であろうと、色々な仕事の上の才能であろうと、全部これは神にあつて、神のために動いていくようになる。それを「靈的」というんです。そうでないものは、どんなに立派そうなものでも、それは全部「肉」という。パウロが言っているとおりで。

自己本位、この世本位のものは全部「肉」という。肉というのは肉体のことではないよ。肉体は善くも悪くもない。これは器だから。肉というのは自己本位のこと。エゴイズムを肉という。神中心、キリスト中心、これを「靈」という。何か摩訶不思議なことを靈といっているのではない。靈も色々な靈があるけれども、この靈は聖靈の世界です。神・キリストの靈は聖靈だから。

「私が十字架に架かつて、それから天界に行つてからお前たちに聖靈を与える。待つていろ。今、与えるわけにいかない。十字架を通らなければ、お前たちを本当に我無き世界に入れるわけにいかない」

と。相対的な我々はみな罪びとにすぎない。けれども、絶対の境地を絶対恩寵としていただくわけだ。

「それをいただいているか、いただいていないか」

が、本当の信仰か觀念か、という分かれ目になるわけです。十字架という贖罪の命題をただ頭でもつて信じ込んだつてだめだよ。そこは、パウロの

「我れキリストと共に十字架せられたり。もはや我れ生くるにあらず」

あのガラテヤ書2章20節というのは大変なパウロの言葉です。

「生きているんだけれども、もう生きているのではない。相対的なパウロは、私は生きている。けれども本当は生きているのではない。キリストが生きているんだ」

ということですよ。

そして、その相手は神・キリストだから、その内容は無限大なんです、質的に無限大なんです。質的に無限性をもっている。私たちは量的に無限なんてことはあり得ない。質的な無限性をもっている。だから、地上にいる限り、いくらでもやらざるを得ない。学ばざるを得ない、仕事をせざるを得ない。みなこの

「ざるを得ない」

世界です。「しようか」ではない。熾^{さか}んなるかな、この生命力は。本当ですよ、普通の人たちは分からないね、こういう熾んな事態が。一日を千年のごとくに生きているわけだ。

「永遠」というのは何か時間の長さかと思うけれども、そうではない。永遠というのは質的なことなんだ。質的に滅びないものを永遠という。この花はしばみまします。萎^{しほ}みますけれども、今この陽の光で咲いている姿には永遠性がある。滅び行くものの中に滅びざるものを見ていかなければだめです。ただ



「^{はか}夢ない」

と言つて、あきらめるような、そんなことではない。素晴らしいんだ。

●無相の相

『エン・クリスト』誌第2号の「無の神学の聖書の根拠」のところに、私は

「神の像の如く、^{かたち}」

と書いていますが、あれは「如く」ではない。これは

「神の相に即して、^{すがた}」

です。即相です。神さまは私たちには分からない。無相なんです。お爺さんでも何でもない。キリストが「父よ」と呼んでいる神さまは、相が無い、無相なんです。無相の相です。無相の相のこの相になったのがキリストなんだ。神さまは無相だけれども、これが本当に相として現象したのがキリストです。

「我を見し者は父を見しなり」

というのがそのことです。今度は、

「我を見し者はキリストを見しなり」

と、あなた方一人一人が仰れなくては。罪びとである相対的存在の奥に、罪びとでないところの絶対的なものがきているから、

「我を見よ」

ということが言えるんです。パウロもペテロもその世界に入っていた。ところが、普通のクリスチャンにはそういう境地が分からない。

「だいぶ信仰が進んで、靈的にも力が出てきたから、『我を見よ』」

と、そうじゃないよ。逆に言うのと、

「完全にぶつつぶれている我を見よ」

ということ。

「完全にぶつつぶれて何もない。キリストだけが光るぞ。そういう私を見てくれ。」

わが内なる金剛石であるキリストを見てくれ」

というわけです。こういう言い方は全部、真理なんです。無愛の愛という。

「愛はありません。キリストの愛が入ってきました」

と。みんなそうです。無義の義。無智の智。無道の道。福音の御霊の世界はそういう表現でなければ言えない。

無相なる神の相に即して私たちは創造された。だから、本来、神の霊が止ま^{とど}まっている^{ひと}霊止である。ゲートという大詩人はその角度が非常に好きだった。

「我、神のうちに生き動きまた在るなり」

という。



「神・大自然・我」

というのが融合している世界です。

だから、この即です。このように実は造られた。これは自然科学的な真理とは違う。自然科学的真理から、人間はどういうようにして出来たか、いくらでも研究してください。いくらでも、その相対的な真理はあります。けれども、この本当の存在としての人というものはそうじゃない。ニュートンの物理学は素晴らしい真理をもったが、アインシュタインがそれをもうひとつ包んでしまった。更にもうひとつ何か出てくるかは知りませんけれども。

●無限性

要するに、どの世界においても、人間は

「これでいい」

なんていうところは一つもない。ダンテやゲーテの詩は素晴らしい。けれども、あれはあれで未完成なんです。完成していながら未完成なんです。また、本ものは未完成でありながら、完成しているんです。完成というのは、ただ姿が整っているということではない。

実は、完成というよりも、無限性をもっていると言った方がいくらいですね、未完成とか完成とかいう言葉よりも。「全き」というのは、何かやはり無限性ということだね。限り無い。展開して止まずして、しかもそこでもって満たされつつ行くという、不思議な世界です。満たされ溢れていく。正に泉だね。

ひとを神さまは男性と女性にお創りになった。素晴らしいものです。女性は女性らしさ、男性は男性らしさがある。それを男女同権なんて、ただ権利の方からばかり言っているのはとんでもない。それぞれの特色というものの、他をもって置き換えできないものがある。本当のひとはそれが渾然としてある。永遠に男性的なるものと永遠に女性的なるものがある。一つになると、永遠に人間的なるものの、本当のひとになる。

真理というのは、全部これは円、還、関係なんです。グルグル回っている。天体と同じように。だから、宇宙というものは素晴らしいものだね。私は物理、数学ができれば、正直、天文学をやりたいくらいだね。しかし、天文学はできなくても――多少は、聞いて楽しく想像はできますが――その大宇宙の中に散歩するような、そういう心にまで人間は成りうる。

私の詩の世界の場はそういうところだからね。それは、百年やそこで学びきれものではない。いくらでも学びたいことは沢山ある。

野球でも、大事なのは意気込みひとつなんです。もちろん、技は両チームとも相当な技をもっている。そうなってくると、意気込みひとつです。意気込みの最後のところは、この「気」なんだ。気の世界です。誰かがホームランを打つと、それから、乗っかってくるよう



なことではだめなんです。打てない時こそ、逆に力が出るような選手にならなければだめです。そういう選手でなければ、本当の大きなナインにはなれない。ピッチャーであろうと、バッターであろうと、他の選手であろうと、この気の世界に入ったら、本当の球を放れるし、本当のバッティングができるんです。

「今度は何が来るだろうか」

なんて、そんなことを予想したつてだめだ。そうすると、いい球がきているのに、逃してしまったりする。その瞬間にパッと打てるような、それだけの選手はやはりいないね。私は野球が本当に出来れば、この境地なら、そういう選手になれるね。ピッチャーが放るその瞬間に球がどこにくるか分かる。そのことを私はいつかソネットの中で歌ってあるよ。

私は競馬というのはあまり見たことはないけれども、馬と騎手とが本当に一つになっているか。これが本当に一つになっていると、

「鞍上人無し、鞍下馬無し」
あんじょう あんか

という世界に入る。鞍の上に人がいない。鞍の下に馬がない。こういう走り方になったら、これは優勝する。これが本当に一つにとけた世界、無の世界です。無力の力という。パウロが

「我弱きときに強ければなり」

と言った。本当に無力のときに凄い力がある。蛍光灯じゃないんだ、太陽の光なんだ。太陽の光を受けとっていないとね。

●死んでも死にませんよ

天野先生の奥さんが101歳で病院にいらつしやる。もう行っても、誰が来たか分かるか分からないくらい。

「神さまの力をいただきましたましよう」

と言って、私は按手して祈った。まあ、そういう方に

「死んでも死にませんよ」

なんて、そんなことは言えないけれどもさ。

「我を信受する者は、死んでも死なない」

とキリストが言われる。

私は讃美歌の歌詞をみながら選んでいるんだから、あなた方はいい加減な気持で歌ってたらだめだよ。讃美歌285番「主よみ手もて」の一番すごいところは第4節の終わりの2行です。

「せめもはじめ 死もほろびも

何かはあらん 主にまかせて」

本当にその境地に入れるか。いい加減な気持で歌えないんだ、この句は。「責めも恥も」、



人から恥を受ける。色々な迫害にあう。「死も滅びも」、死んでもそんなものは「何かはあらん」、全部「主に任せて」という。本当にこの境地に入っていれば、死んでも死なないです。また、無の境地の最後は、相対的にいうと、この世の死なんだよな。けれども、この死も滅ぼしてしまった。死に打ち勝っている。「何かあらん」と、主にまかせます。私は死んだら、

「往生した」

と書いてもらおう。向こうで生きるんだ。通知に

「死にました」

なんて書いてたら困るよ、

「逝去しました」

なんて、冗談じゃない。

「小池辰雄は往生した」

と書いてくれなくては。往きて生きましたという。あなた方は

「小池先生、万歳！ ハレルヤ！」

と言ってくれ。今度の『エン・クリスト』40号にも、

「キリストが今日、私を恵み深くも召したもうならば、喜んで行きます」

という句をドイツ語で書いた。

「もうこんな世の中には未練はありません」

と。

「まあ、先生は八十歳を過ぎたから、あんなことを言えるけれども、俺たちはまだだ」

なんて。いいよ、「まだ」で。おおいに「まだ」でいてください。それともうひとつ、

「詩を書くまでは絶対に死にません。神さまは、キリストは必ず支えてくださる」

と。これは矛盾していると書いたでしょ。

仏教には

「往生」

なんていういい言葉があるね。誰が言い出したのだろう。クリスチャンは往きて生きる。肉体はそのうちにかまどで焼かれるよ。私は何回見たかわからないんだ。いやだね、あれは。白骨を拾ったりして。だけでもう、魂は霊体をいただいて向こう側に行っちゃっているんだからね。エノクみたいに

「居らずなりき」

なんてのは大変なもんだ。

「エノク、神と三百年生きながらえて、居らずなりき」

という。



●無即無限無量

この「無」という字は不思議でしょ。無限無量のことを表す。全然無い、自分なんかありません、何もありませんと。だから、自分を何ものともしないというその無は即無限無量ということになる。

$$0 \parallel 1 \parallel \infty$$

というのは大真理なんだ。数学でいうと、 $1 \div 0 \parallel \infty$ 、1を0で割ると ∞ （無限大）なんだ。それが十字架のありがたさ、聖霊のありがたさです。パウロがあれだけ十字架のことを言い、あれだけ聖霊のことを言った。パウロの書翰はすごいよ。それを普通のキリスト教はいい加減にしているんだからね。

アブラハムは自分の一子イサクを祭壇に献げようと、身を切る思いだった。それを黙々としてやろうとしたら、

「お前は本当に私を受けとった」

と、その信仰を義とされた。神・キリストを絶対に「然り」とすることが、「義とされる」ということです。

「信仰によつて義とされる」

とはそのことなんだ。義を与えられるわけだ。

「義とされる」

とは元々は裁判の言葉で、罪がない、義である、無罪であるとされること。それが無罪の世界だ。私たちもキリストの十字架で無罪にされているんだ、本当に受けとれば。それを「義とされる」というわけだ。

キリストを完全に受けとる。「信仰」なんて言うよりか、体受、体で受けとることです。体受でも身受でもいい。

「まこととして受けとる」

ということですよ。この「信」という字は「まこと」という字なんだ。それから人間関係で「裏切らない」という字だ。裏切ったり、背いたりしない、それが「信」という字です。神さまとの関係、人間との関係のただしいのを「信」と言う。自分自身の心の上で「まこと」というのはこっちの「真」を書く。それから自然科学的な真理もこっちの真です。この「信」の字は人格的霊的な関係の方だ。「信^{まこと}」というのは「人の言」を互いに信じるという字だからね。

●人間の世界は大ドラマ

人間の世界は色々なことで大ドラマだよな、どうにもならん。そういうどうにもならん世界で、キリストは、このどうにもならん世界、人間の罪、混沌たる殺伐たる現実を全部引き受けてしまうのが、「愛」というものです。ローマの皇帝から兵隊から官吏から、それ



から民衆から、パリサイ、サドカイ、ああいう連中から、なんののかのと迫害される。民衆は始めは大いに助けられたから、キリストをメシヤ、王者であると思ったところが、どっこい、キリストを政治犯として十字架に架けた。

「ローマの皇帝の他に王者なんかいたら大変だ」

てなわけで。この地上にそういった王国を建てるなんてユダヤ人が考えていたら、そういうメシヤでもなかった。とうとう色々な意味から、キリストは十字架に架けられてしまった。何でもキリストは自分でお見通しなんだ。天涯孤独だ。しかも、

「わが神、わが神、なんぞ我を棄てたまいし」

と、神さまにむかつてもう言った。

「なぜ、お棄てになるか。あなたに100%、お従いしたではないですか。あなたと一

緒に生きていたではないですか、なぜ、お棄てになるか」

と。この

「なんぞ我を棄てたまいし」

という言葉は、

「この縦の関係の義が倒れてどうするか」

という反語だと、私は申し上げているでしょ。棄てられるべき人ではなかった。しかし、あの言葉の奥にはもちろん、

「お前は十字架にかかれ、皆の罪を背負え、極刑をうけろ」

と、ゲッセマネの祈りでキリストはそれを受けとったからね。そして、三日目には甦えつて、それから40日たつて天界へ行つてしまっただけども。大変な人ですよ、本当に。世界の東西古今にキリストの他にはいない。お釈迦さんでもとてもキリストにはかなわん。この世の30歳位でこれだけのことをされた。それはもう、本当にキリストに圧倒される。福音書を読んで、あなた方、降参して平伏して、キリストにしがみついてくださいよ。いやもう、キリストは

「皆に棄てられても、私はお前を棄てないぞ」

と、そういう御声を聞いてください。キリストの愛はもつとも力強い愛なんです。全世界を背負っているんだ。ところが、それを拒む者は自分でもって地獄へ落っこちていくだけののなした。誰も地獄へおとさない。キリストは落とそうとしない。十字架の片一方の盗賊はキリストに

「お前は今日、私と一緒にパラダイスだ」

と言われた。傲慢なやつは地獄へ落っこちてしまう。愛からこぼれているんだ、みんな。せつかくの無条件の絶対愛から、拒んでこぼれていく。もつたない話ですよ。



●無の諸相

自分を何ものとしなかった、この無者キリストは本当に無限者である。神と全く一つで、「父と我とは一つなり」

と言う。宇宙大の気宇をもっているかたです。こんな熾んな福音はモーセの十誡でゴタゴタやっているような世界と違う。だから、パウロは

「律法の義を塵芥の如く思う」

と言って、パウロだけは本当にキリストを受けとったね。まだペテロの方はちょっと浮き沈みがありましたけれども。ペテロも終わりはいいです。パウロというのは大変な器だね。そういう角度から読めば、パウロの書翰も楽しくなりますよ。

一切のわけへだてのない、この愛には圧倒される。どんな人でも、キリストの愛に救われない人は一人もないわけだ、受けとりさえすれば。しかも、条件は要らない。無条件、平伏だけ、降参するだけです。無とされているんだから。十字架で無罪にされているんだから。無という言葉は単なる悟りではないですよ。

「悟りで無我になった」

ということではない。本当に無我になんかなれるかというんだ。

あなた方、こうやって私は語り、あなた方は聞きながら、そういう境地に入って、もう何とも言えないじゃないですか。そういう信仰の現実が本当の無の実存というんです。無を生きると言ってもいい。我々は無を生きている。無に生かされています。太陽に引っ張り回されている地球と同じだよ。太陽の光線でもって生かされている。それは完全に受け身でしよ。

「これは私のもの」

というものがありますか。ひとつもない。みんな、存在そのものが神さまに造られている。親から、社会や国家から、歴史的な色々な意味で、とにかく受け身だ。それをね、今の民主主義とか自由とかは、全然自我本位のもので、そんなのはいつまでたつたって、平和になんかなりっこない。歴史の終わりまでキリストは十字架されている。しかしながら、十字架されていると同時に、キリストはもの凄い聖霊の生けるキリストとして、力強くいつ何どきどこにおいても働きたもう。

だから、なにもエルサレムへ行く必要もない。それはイスラエルへ旅行する必要がないという意味で私は言っているのではない。あそこへ行くと、昔の事を思っ、しみじみとした気持ちにもなります。

その無というのはそれだけの色々な諸相をもっているから、「無の諸相」と申し上げたわけです。



●無者魂になれ

では、著作集第十巻の「10月11日 イエスと富める青年」の項を読みます。

「なぜ私を善いと言つか。神一人のほかに善い（といえる）者は居ない」（マルコ10・18）

イエスがガリラヤ方面から南エルサレムに向かう最後の旅の途上に青年が走り寄り、跪ひざまずつてイエスにたずねた。「善き先生、永遠の生命を嗣つぐには何をしたら好いですか」と。ユダヤの青年の問題意識はすばらしい。永遠の生命と行為の関係を問うている。今の日本の青年にこのような問題を問題としている者果たして在りやである。

ところでイエスはまづ何と言つか。右の言の「善き先生」がイエスの心につかかった。「何故私を善いと言つか。善い者は神の他に一人も居ない」と断乎として喝破した。イエスは自分を何者とも思っていない。無善、無教、無行者なのである。彼は皆神から臨む善、愛、教、言、行を体現しているまでのことである。だから私はイエス・キリストのことを無者と申し上げているのである。

次にイエスはモーセの「十言」（十誡）をお前は知っているか、どうだなと訊きいた。「幼い時から遵したがつております」と青年は答えた。イエスは感心だと愛いとづくんで目を止めて更に言った。「だがなほ一つ欠けているよ、往もつてお前の所有物をみんな売うつて貧者に施せ、そしたら宝を天に得る。そして私に従したがって来なさい」（10・21）。金持ちの青年は悲しんで踵くびすを返して去った。イエスは弟子どもに言った、「金持ちが神の国に入るより駱駝が針の穴を通る方が易しい」（10・25）と。当時「針の穴」という名称の狭い門があつたのでイエスはこう言った。金持ちに限らない。凡そ人間は自分の財力、体力、智力、権勢、等々に於いて自分を惜しんでいる。おのれを神有として無者魂になれとのみ旨だ。

自分を神のものとし、神有しんゆうとして、無者魂になる。日本中どこへ行つても、こんなことを、こういったような無のことを言う人は、牧師さんも神学者もいません。私はキリストさまから教わったんだから。キリストの実存からそれを告白している。これは上からの真理だから、仕方がない。私が考えだしたのでもなんでもない。

「0=1=8」

これは忘れないでくださいよ。それが私たちの本当の実存構造だから。十字架で「0」にされた。聖霊でもつてキリストと「1」になった。その内容は「8」（無限大）である。こういうことです。

皆さん、楽しくないですか。私は楽しくてしょうがない。くすぶつたような顔しているな（笑）。くすぶつてなんかいたらしょうがない。では、終わります。

